

【New Poetry House 日誌】
ぬむ無む詩の鑑賞会
 The Poetry With Noname
 奇数月の第二日曜日、定期開催
 ひよりひよりの
 詩への想いを大切に。



◇ 2013/03/10 (Sun)

参加者が少ない時は濃密版だ☆ 八編の持ち寄り詩の中から、迷いに迷ってこちらをご紹介します！

「三月の水」 作者？

枝 石ころ 行き止まり 切り株の腰掛け 少しだけ独りぼっち
 ガラスの破片 これは人生 これは太陽 これは夜 これは死

銃 この足 この地面 この身と骨
 道路の響き スリングショット 魚 閃光 銀色の輝き
 争い 踏け 弓の射程 風の森 廊下の足音
 擦り傷 こぶ 何でもない

槍 釘 先端 爪 ぼたぼた
 この物語の終幕
 トラックが運んでくる一杯の煉瓦 柔らかな朝日の中
 銃声 丑三つ時

1マイル やるべき事 前進 衝突



この歌詞は、とんだ底から復活する過程で書かれたものらしい。夏の終わり・秋の始まりを歌っているようです。ボサノバの詞を読むなんて初めてだ、と田口さん。意味を追って歌い上げるんじゃないかという疑問。近付いたり離れたたり、心の動きのよう。動きだけを記すことで「私たちにとって特別な意味を感じさせるもの」になった…？

ときどき 詩が予言していた
 と感じる出来事はありますか？
 でもそれは結果に過ぎないのかも
 しない。この曲が震災を想定していなかったように。詩は時と場

女の子 イン(韻?) 風邪 おたふく風邪
 家の予定 ベッドの中の身体 立ち往生した車
 ぬかるみ ぬかるみ

そして川岸が語る 三月の水
 人生の約束 心の喜び

浮遊 漂流 飛行 翼
 鷹 うずら 春の約束 泉の源
 最終行 落胆した貴方の顔
 喪失 発見

蛇 枝 あいつ あの男
 貴方の手の中のトゲ そしてつま先の傷

川岸が語る 三月の水
 それは人生の約束 それはあなたの心の喜び

一点 ひと粒 蜂 ひと口
 瞬き 秃鷹 突如の闇

ピン 針 一撃 痛み
 蝸牛 なぞなぞ 借り鉢 染み

枝 石ころ 最後の荷物 切り株の腰掛け 一本道

そして川岸が語る 三月の水
 絶望の終わり 心の喜び 心の喜び 心の喜び

この足 この地面
 枝 石ころ これは予感 これは希望



合によって変化しうるものなんだ… ってことが、とてもリアルに感じられました。

さらに、草野心平の蛙をモチーフとした詩を四編続けて鑑賞!! 集中的に鑑賞することにより深く味わうことが出来ました。

蛙って何なのか？ 蛙に何を感じたのか？ 蛙に何を語らせたのか？ 詩の形ひとつとっても古ぼけない魅力があり、何よりその迫力！ しばらく草野心平ブームが続きそうです。

第一回目の開催から三年目、集まったのは三名でしたが、困んだ詩は思わず何か言いたくなっちゃうようなものばかり。次はどんな詩に出会えるのかな…。

三人で鑑賞した詩のタイトルは…

- ・三月の水
- ・ヤマカガシの腹の中から仲間告げる
- ・こびらっふの独白
- ・天気
- ・蛙は地べたに生きる天国である
- ・イタカ
- ・便所目当ての百貨店だが 買い物顔を作る
- ・歩く

ゲリゲの言葉

◇ 2013/05/11 (Sat)

日本詩人クラブ秋田大会に参加させて頂きました。
第四十六回日本詩人クラブ賞、この一編をどうぞ!!

「海女」
あま

作者 ?

ハニヨ*
激音の海を伸びやかにすすむ大腿
乳房からしたたる光の雫
ハニヨの探った海草は主張する強さを持つ
あま
原母音のように口を開けて待つ子供たち
ゆったり丸い尻の湾に潮が満ちて
あの世を垣間見るような海苔の幕

時間の水深を降り
地球との命綱をたどり
よろこびの芯を見つげに
一人分の息をこめ
息の源で自分に出会う
海のなめらかさに背がしなる
白い木槿が水中で咲く
磯ノミで言葉は岩から剥ぎ取る
硬い文脈の中から
柔らかいものがきらめく
柔らかい言葉の中に
一筋の航跡を見出す
生の糧を海からいただいできた
ハニヨ あま

いくつもの顔を持つ海
いくつもの子宮を秘める海
無数の傷が交差する海
海の溝が荒れないように女神に祈る
指の間に歌が泳ぎ出すヒレが生えるよう
洪水と砂漠の街で祈る

*ハニヨ 朝鮮語で海女のこと

かつて海だった場所。作者の佐川亜紀さん（横浜）
が朗読して下さいました。自らが詩を書くことを綴って
いるのでしょうか。耳を傾け一緒に潜りながら、一人の
海を降りていくような気もします。鳥肌が立ってしま
いました。聞き逃した皆さん、勿体なかつた〜!!

シンボジウムでは、詩は中央集権であってはならない、
そもそも中央とか地方という括り
方に無理がある、秋田にしか書け
ない詩がある、など。熱い想いが
語られました。

そんな中、福司満さんが朗読し
てくれたのは大潟村を舞台にした
詩「ちっちゃ海があ」。地元の人
として発せられる言葉がシヨッキ
ングに迫ります。そのあまりの衝
撃に、私を含め周囲の数名は思わ
ずフリーズしてしまいました。

